

アートフィールドウォーカーキングガイド

2016 vol.9 (通巻 377号)

ギャラリー

9

GALLERY

【特集】

テーマ別に先取り！ 2016年度下半期
絶対に行きたい！！美術館展

連載 50 回記念

小川英晴の新アート縦横 No.9 **ゴノキ・ミクオ**

9月の全国美術展【美術館／百貨店／画廊】スケジュール&マップ

神代桜との出会いからすべては始まった



山梨県北杜市にある樹齢約2000年の山高神代桜との出会いが運命的であったと語るのは、新たな日本画表現を追求する作家の一人・菅原健彦（1962）である。多摩美術大学在学中から異彩を放つ新人として注目された作家は、1996年に山高神代桜との出会いを機に、桜樹への傾倒が始まっていく。

「屋久島の杉、ニューギランドの森、雲龍図……これらのモチーフは、神代桜の幹から繋がっています。モチーフ自体がテーマではありませんので、何を描いても根底にあるものは同じです」

大地に根付く大樹そのものの生命力に魅了された菅原は、墨と筆を用いた独自の表現で、自然界に潜む生命の力強さを描いていく。一方、花びらや雪など、移ろうモチーフを加えることで、永遠と刹那、過去と未来といった時間を画面に交錯させ、生命の姿を流麗に描き上げていく。

「花を描くようになってからは彩色を取り入れました。また、4年前のギャルリーためながパリ店での個展を機に、ヨーロッパでは作品に物足りなさを感じ、



《淡墨冬葎》194 × 259cm

金箔を用いるようになりました」当初から一貫した意図のもと約20年続く桜樹をモチーフにした作品は、少しずつ姿を変えながら展開されている。ギャルリーためながの東京店では2013年以来2度目の個展となる今回、桜樹を中心とした約40点の新作を発表。自然の持つ生命力と作品世界の奥深さを同時に楽しむことができるだろう。

菅原健彦展

9月16日→10月16日
ギャラリーためなが（銀座）⑩



《滝桜》194 × 260cm